様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００６６

研究課題名（和文）新ニヤーヤ学派における言語分析の方法に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Methodology of Language Analysis in Navya-nyaya

研究代表者
和田　壽弘（Wada, Toshihiro）

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：００２０１２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：　新ニヤーヤ学派の体系を確立したガンゲーシャ（14世紀）の『タットヴァ・チンターマニ』(Tattva-cintamani）の第４部「言語部」(Sabda-khanda）における「定動詞語尾章」(Akhyata-vada）の英訳・解説を作成した。テキストを分割して番号を付して議論の構造も明示した。初期のこの学派の言語分析の手法の特徴を明らかにし、ウダヤナ（11世紀）の影響が大きいことを解明した。併せて、2005年にオリッサ州で発見されたウダヤナ作『否定辞論頌』（Nan-vada-karika）の写本を分析し、著者問題を含めて初期新ニヤーヤ学派の研究に使用できるかどうか考察を試みた。

研究成果の概要（英文）：This project has provided an English translation of the "Verbal Suffix Chapter" (Akhyata-vada) of the Tattva-cinta-mani of Gangesa (ca. 14th C.) with annotation. The analysis of this chapter has clarified the structure of the chapter and the method of analyzing language in early Navya-nyaya. The annotation indicates that Udayana (ca. 11th c.) greatly influenced Gangesa. The project has also translated with annotation the Nan-vada-karika (Verses of a discussion of the Meaning of the Negative Particle) of Udayana whose manuscript was discovered in Orissa State in 2005, and investigated whether this text represents views of language analysis in early Navya-nyaya or not.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：新ニヤーヤ学　ガンゲーシャ　定動詞語尾　『タットヴァ・チンターマニ』　ウダヤナ　意味論　『否定辞論頌』　ラグナータ・シローマニ

１．研究開始当初の背景

(1)　新ニヤーヤ学派は14世紀にガンゲーシャが著した『タットヴァ・チンターマニ』（Tattva-cintamani）によって体系が確立されて以来、その術語及び記述の方法はインド哲学のすべての学派に浸透していった。哲学以外の分野、例えば修辞学やダルマ文献においても注釈書を読む場合には、新ニヤーヤ学派の術語の知識なくしては理解ができない。中世インドの思想を研究するためには新ニヤーヤ学派の研究は避けて通れない。中世以降のインドの哲学・思想・宗教に関わる文献の研究にとって、新ニヤーヤ学派は基礎学を提供すると言っても過言ではない。加えて、現代にまで繋がる数少ない学問伝統であり、「生きている」。

　研究代表者はこれまで新ニヤーヤ学派の推論理論の研究を中心に続けてきたが、この学派の術語と記述方法に関する研究の蓄積もある。このような研究の蓄積に基づいて、この学派の初期の言語論の研究を遂行しようとする研究者は他にいない。

　本研究の基礎となる研究代表者の代表的業績は以下の２書である。

・*Invariable Concomitance in Navya-Nyaya*, Delhi: Indian Books Centre, 1990, 全 xii+535 頁.

・*The Analytical Method of Navya-Nyaya*, Groningen: Egbert Forsten Publishing, 2007, 全 viii+220 頁.

　後者の業績によって、新ニヤーヤ学派の直接的基礎を形成した 11 世紀のウダヤナから、この学派の体系を確立した14世紀のガンゲーシャに至るまでを「初期新ニヤーヤ学派」と呼ぶことにしている。

(2)　我が国における新ニヤーヤ学派の言語論の主要な研究は、本研究代表者がかつて行った「インド哲学における言語分析」(1990, 1993, 1995, 1996) と題する一連の論文のみである。この研究は、17 世紀に著された『ニヤーヤ・シッダーンタ・ムクターヴァリー』(Nyaya-siddhanta-muktavali) の「言語論の章」を和訳し、詳細な注を付けたものである。この書は14世紀のガンゲーシャと彼以降の説を要約したものであるから、その研究によって必ずしも初期新ニヤーヤ学派の立場が明確にできたというわけではない。

　海外では、1500 年頃のラグナータの「定動詞語尾章」(Akhyata-[sakti]-vada)、17 世紀のジャガッドイーシャの『シャブダ・シャクティ・プラカーシカー』(Sabda-sakti-prakasika)、17 世紀のガダーダラの『シャクティ・ヴァーダ』(Sakti-vada) の翻訳研究がこれまでされてきた。いずれの研究も、新ニヤーヤ学派の体系が確立されて後かなりの時代を経た文献を扱っており、初期新ニヤーヤ学派の言語論を扱った確かな文献学的研究は、海外でもほとんど存在しない。

(3)　初期新ニヤーヤ学派の言語論に関する文献学的研究には、V.P. Bhatta, *Word: the Sabdakhanda of the Tattva-cintamani* (Delhi: Eastern Book Linkers, 2005) にがあり、これはガンゲーシャ作『タットヴァ・チンターマニ』「言語部」(Sabda-khanda) の翻訳・解説である。世界初の「言語部」の全訳として評価できる。しかしながら、この翻訳・解説は議論の構造を正確に提示できていない。例えば、「言語部」の中の「定動詞語尾章」(Akhyata-vada) で繰り広げられるミーマーンサー学派の主張の中にニヤーヤ学派の反論が紹介されるが、その区別を明確にせずに纏めてミーマーンサー学派の主張とするため、議論の流れが極めて理解しにくい。また、論争相手の同定の根拠が挙げられていないため、同定に信頼が置けない。テキストの構造を反映した翻訳と信頼の置ける文献学的研究が俟たれる。

(4)　本研究代表者は、ガンゲーシャ作『タットヴァ・チンターマニ』「言語部」「定動詞語尾章」に基づいて、新ニヤーヤ学派における単語（あるいは最小言語単位である形態素）の意味が決定される仕組みを、“A Navya-nyaya Presupposition in Determining the Meaning of Words”（in Masaaki Hattori [ed.], *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture* 90, 2006, pp. 71-91.）によって解明した。さらに、“Gangesa on the Meaning of Verbal Suffixes (1)”（in K. Preisendanz [ed.], *Expanding and Merging Horizons*, Vienna: the Austrian Academy of Sciences, 2007, pp. 415-429.）では、当該テキストの英訳と解説に着手し、11 世紀のウダヤナの『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』（Nyaya-kusumanjali）における議論と平行関係にあることを、限られた文脈の中で具体的箇所と共に指摘した。この作業は研究費等の不足により中断したままである。

　ちなみに、前出の Bhatta [2005] は、「定動詞語尾章」についてガンゲーシャとウダヤナの関係には注意を払っていない。

(5)　オリッサ州立博物館（インド、オリッサ州ブバネーシュラル市）で 2005 年に、ウダヤナ作『否定辞論頌』（Nan-vada-karika）の写本（書写年代不明）が「発見」された。（博物館のカタログには記載されているが、2005 年まで注目した研究者がいなかった。）否定辞の意味論を扱っており、著者名は、その内容がガンゲーシャに影響を与えた可能性が高いことを示唆する。このテキストの作者の同定や、類似の題目を持つ 16 世紀のラグナータの『否定辞論』（Nan-vada）との先後関係を明らかにする必要がある。もし作者

のウダヤナが 11 世紀に活躍したウダヤナならば、あるいは、少なくとも『否定辞論頌』が『否定辞論』に先行するならば、前者のテキストが後の新ニヤーヤ学に影響を与えたこととなり、新ニヤーヤ学研究におけるこのテキストの重要度は計り知れない。ただし、『否定辞論頌』とガンゲーシャの『タットヴァ・チンターマニ』との先後関係が判明しない限りは、このテキストが初期新ニヤーヤ学派の言語論の研究に直接的に有効かどうかは分からない。

２．研究の目的

(1)　言語論に関する初期新ニヤーヤ学派の特徴を、ガンゲーシャ（14 世紀）作『タットヴァ・チンターマニ』「言語部」「定動詞語尾章」のテキスト全体の英語訳と解説を完成することにより、明らかにする。そして、このテキストでは学派間の質疑の応酬が複雑に絡み合っているので、ガンゲーシャ自身の結論が見えにくい。この結論を解明する。

「定動詞語尾章」の解読を進める過程において、このテキストとウダヤナの『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』における議論との繋がりをさらに明らかにし、ウダヤナとガンゲーシャの関係を解明する。前出論文の Wada［2007］は、限られた箇所でウダヤナのガンゲーシャに対する影響が見られることを指摘したが、それが「定動詞語尾章」の他の部分においても妥当するかどうかを調査する。

(2)　オリッサ州で 2005 年に発見された写本から知られるウダヤナ作『否定辞論頌』（Nan-vada-karika）と 11 世紀に活躍したとされるウダヤナとの関係の解明を行う。もしこのテキストが 11 世紀のウダヤナの作だとすると、新ニヤーヤ学の術語体系がかなり早い時代（初期新ニヤーヤ学派の時代）に確立されていたことになる。

(3)　11 世紀のウダヤナと 14 世紀のガンゲーシャとの間には、シャシャダラとマニカンタがいる。この２人は、「初期新ニヤーヤ学派」の時代に属するが、思想史上の特徴が未だはっきりとはしていない。前者は『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』（Nyaya-siddhanta-dipa）を、後者は『ニヤーヤ・ラトナ』（Nyāya-ratna）を著したが、この２人とウダヤナおよびガンゲーシャとの関わりも視野に収めるために、まずは両テキストのデータベースを作成する。

３．研究の方法

「研究の目的」(1)～(3)に対する方法は、以下の(1)～(3)にそれぞれ対応する。

(1)　ガンゲーシャ（14 世紀）の『タットヴァ・チンターマニ』「定動詞語尾章」の英語訳を、15 世紀のジャヤデーヴァによる注釈書『タットヴァ・チンターマニ・アーローカ』（Tattva-cintamaai-aloka）を参照しながら作成する。これは現存する注釈書の中では最も古いものである。議論の構造を分かりやすくするために、テキストを分割して構造を示す番号付けを行う。

テキストは以下のように 8 部分に分割できる。(a)序：ニヤーヤ学派の前提、(b)ミーマーンサー学派の説、(c)ニヤーヤ学派の反論、(d)『ラトナコーシャ』の説、(e) 『ラトナコーシャ』の説への反論、(f)文法学派による反論、(g)ニヤーヤ学派の伝統説、(h)ニヤーヤ学派説の詳解である。この内、(a)と(b)は前出論文の Wada［2007］においてすでに英語訳と分析とを終えたので、本研究は残りの 6 部分の英訳と解説を試みる。

ガンゲーシャ自身の結論については、「定動詞語尾章」全体から、否定されていない見解を彼の結論に加えることができるという前提で、それらの見解を回収する。

(c)以降の部分に、ウダヤナの『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』第５章と対応箇所があるかどうかを精査する。

(2)　『否定辞論頌』の写本の発見者である S.C.ダシュ氏と共同で、このテキストの英語訳と解説の作成とを行うと同時に、著者問題への見通しを立てる。この問題について、テキスト外の情報が得られていないので、テキスト内に手がかりを求めることとなる。

(3)　ガンゲーシャより以前の初期新ニヤーヤ学派のテキストである『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』と『ニヤーヤ・ラトナ』のデータベースの作成に取り掛かる。

(4)　(1)と(2)の成果を出来る限り英語で発表し、研究成果を国際的に発信する。

４．研究成果

「研究の方法」(1)～(4)に対する成果は、以下の(1)～(4)にそれぞれ対応する。

(1)「研究の方法」(1)の成果は「雑誌論文」①②⑤であり、これによってガンゲーシャの「定動詞語尾章」のテキストを分節し、分析を終えていなかった 8 部分の内(c)～(h)の英訳と解説を作成し終えた。この成果によって、テキストで繰り広げられる議論の内容と構造が明確となった。

なお、①は(c)(d)(e)を、②は(f)(g)を、⑤は(h)を扱った。テキストにはさらに下位番号を付すことにより、議論の構造を明示した。

ガンゲーシャ自身の結論に関しては、「雑誌論文」④が成果である。彼自身が述べる結

論部分では、受動態の定動詞語尾が目的性（karmatva）を表示すると明言するに止まるが、彼のことばから能動態の定動詞語尾が表示する意味が推定されることを突き止めた。さらに、ガンゲーシャ自身は明確には述べていないが、非人称受動態の定動詞語尾の意味や定動詞語尾の意味と時制との関係について、彼がどのように考えていたかを、「定動詞語尾章」全体の議論の中から構成した。

ウダヤナの『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』第５章との対応箇所については、くまなく精査することができなかったが、「定動詞語尾章」(「雑誌論文」⑤で扱った箇所、つまり(g))の中に若干の引用を発見した。この成果は不十分ではあるが、Wada［2007］の成果と合わせると、ウダヤナのガンゲーシャに対する影響が相当大きいことが判明した。

「学会発表」では①②⑤⑥⑦⑨⑪⑫⑬に成果が現れている。⑥⑦⑫は、本研究以前に論文として発表していたが、インド・哲学研究会議（Indian Council of Philosophical Research, New Delhi）による招待講義（Lecture Programme, 2013）をインドの複数の大学で、ゴーピカモーハン・バッターチャールヤ記念講義（Professor Gopikamohan Bhattacharya Memorial Lectures, 2014）をクルクシェートラ大学で行うに当たって、修正を加えた。講義後の質疑では、講義の結論に対してはおおむね好意的で疑義は出されなかったので、結論は妥当なものであると考えている。結論は、語の意味を決定する基準は、如何に意味の範囲（集合）を厳密に限定し、数の少ない集合で示すことができるかということである。この結論自体は本研究の研究成果ではないが、本研究期間中に招待講義・記念講義を実施したことにより、インド人研究者にも受け入れられることを確認した。

「学会発表」⑨は、2010 年に発表した論文に基づいているが、本研究のテーマに関わる言語分析と意味論に結びつけて大幅に改訂した内容となっている。ここでは、新ニヤーヤ学における術語/概念の論理形式をそれの意味と考えることを提案している。

(2)　「研究の方法」(2)の成果は「雑誌論文」③⑥と「図書」①である。『否定辞論頌』の作者が 11 世紀のウダヤナではないことだけは確かである。このテキストの中には、16 世紀のラグナータ作『否定辞論』とかなり一致する表現が見られ、内容的にも両者は深い関係にある。「図書」①の共著者であるダシュ氏は、頌形式（karika-form）の『否定辞論頌』がまず成立していて、ラグナータがそれから引用して散文形式（prose-form）の『否定辞論』を著したと主張する。さらに彼はその作者を 12 世紀にオリッサで活躍したもう一人のウダヤナであるとする。これに対して、本研究者は、作者をガンゲーシャ（14 世紀）以降でラグナータ以前と推定するが、一歩進んで、ラグナータ作『否定辞論』が『否定辞論頌』に先行する可能性も指摘した。現時点では、『否定辞論頌』と『否定辞論』の先後関係は決着できない。

『否定辞論頌』の著作年代（時代）決定あるいは著作地域決定のための手がかりとして、この文献に言及されるサンスクリット例文や祭式執行の時間帯に関する記述を挙げることができるかも知れない。

『否定辞論頌』とガンゲーシャの『タットヴァ・チンターマニ』あるいは「定動詞語尾章」との関わりについては、少なくとも先後関係や影響関係について断定的なことは見いだせなかった。従って、初期新ニヤーヤ学派の研究に『否定辞論頌』を無条件に用いることはできない。

「学会発表」では、③④⑧⑩⑭に成果が現れている。

(3)『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』のテキストデータベースは完成したが、『ニヤーヤ・ラトナ』は入力を完了するに止まり、校正半ばである。

(4)　研究成果の発信は、以下の「５．主な発表論文等」に見られるように、ほとんどが英語による成果の発表であり、成果の国際発信という観点では十分に目的を達した。「雑誌論文」①は世界的に著名なサンスクリット学者の記念論文集であり、②④⑤は海外でも定評のある学術誌である。英語による 10 回の「学会発表」はすべて海外で発表したものであり、国際学会の研究会議での発表やインド政府の下部組織であるインド・哲学研究会議の招待講義および新ニヤーヤ学の有名な研究者の名を冠した記念招待講義である。なお、「学会発表」⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑫⑬⑭は、インド・哲学研究会議（前出）から単行本として出版される予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６件）

① Wada Toshihiro, Gangesa on the Meaning of Verbal Suffixes (2), D.K. Printworld (New Delhi), *Sanskrta-Sadhuta: Goodness of Sanskrit: Studies in Honour of Professor Ashok N. Aklujkar*, 査読有, 2012, 528-544.

② Wada Toshihiro, Gangesa on the Meaning of Verbal Suffixes (3), *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa* 査読有, vol.30, 2013, 1-14.

③ Wada Toshihiro and Subash C. Dash, An Introduction to the *Nanvadakarika* of

Udayana, *Bali-prajna: International Journal of Indology and Culture* 査読有, vol.2, 2013, 1-6.

④ Wada Toshihiro, Gangesa's Theory on the Meaning of Verbal Suffixes (*akhyata*), *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa*, 査読有, vol.31, 2014, 61-75.

⑤ Wada Toshihiro, Gangesa on the Meaning of Verbal Suffixes, *Sanskrit Studies*, 査読有, vol.3, 2014, 178-209.

⑥ 和田壽弘、オリッサ州立博物館所蔵のウダヤナ作『否定辞論頌』(Nan-vada-karika) について、東海仏教、査読有、59 輯、2014、138-152。

〔学会発表〕(計１４件)

① 和田壽弘、インド古典語サンスクリットの文章の意味について、東海印度学仏教学会学術大会、査読有、2011.7.7、東海学園大学。

② Wada Toshihiro, Gangesa's Theory of the Meaning of Verbal Suffixes, XVth World Sanskrit Conference, 査読有, 2012.1.10, Bharatiya Sanskrit Sansthan (New Delhi).

③ 和田壽弘、インド実在論哲学における否定辞の意味、東海印度学仏教学会春季学術大会、査読有、2012.5.19、愛知学院大学。

④ 和田壽弘、オリッサ州立博物館所蔵のウダヤナ作『否定辞論頌』(Nan-vada-karika) の写本について、東海印度学仏教学会学術大会、査読有、2013.7.6、愛知学院大学。

⑤ Wada Toshihiro, Gangesa's Theory of the Meaning of Verbal Suffixes (akhyata), Indian Council of Philosophical Research Lecture Programme, 査読無(招待講義), 2013.11.27, University of Pune (Pune).

⑥ Wada Toshihiro, The Navya-nyaya Principle of Determining the Meaning of Words, Indian Council of Philosophical Research Lecture Programme, 査読無(招待講義), 2013.11.27, University of Pune (Pune).

⑦ Wada Toshihiro, The Navya-nyaya Principle of Determining the Meaning of Words, Indian Council of Philosophical Research Lecture Programme, 査読無(招待講義), 2013.11.29, Jadavpur University (Kolkata).

⑧ Wada Toshihiro, The Requisites for Assuming Absence (*abhava*) in Navya-nyaya from the Viewpoint of the Counterpositive (*pratiyogin*), Indian Council of Philosophical Research Lecture Programme, 査読無(招待講義), 2013.11.30, Jadavpur University (Kolkata).

⑨ Wada Toshihiro, Expression and Logical Structure, Indian Council of Philosophical Research Lecture Programme, 査読無(招待講義), 2013.12.2, Indian Council of Philosophical Research Academic Centre (Lucknow).

⑩ Wada Toshihiro, The Requisites for Assuming Absence (*abhava*) in Navya-nyaya, Indian Council of Philosophical Research Lecture Programme: the First B.K. Matilal Memorial Lecture, 査読無(招待講義), 2013.12.6, Jawaharlal Nehru University (New Delhi).

⑪ 和田壽弘、新ニヤーヤ学派における定動詞語尾（akhyata）の意味について、インド思想史学会学術大会、査読有、2013.12.21、東京大学。

⑫ Wada Toshihiro, The Navya-nyaya Theory of the Meaning of Verbal Suffixes: Gangesa's final view, Professor Gopikamohan Bhattacharya Memorial Lectures for the Year 2013, 査読無(招待講義), 2014.2.25, Kurukshetra University (Kurukshetra).

⑬ Wada Toshihiro, The Navya-nyaya Principle of Determining the Meaning of Words, Professor Gopikamohan Bhattacharya Memorial Lectures for the Year 2013, 査読無(招待講義), 2014.2.25, Kurukshetra University (Kurukshetra).

⑭ Wada Toshihiro, The Requisites for Assuming Absence (*abhava*) in Navya-nyaya from the Perspective of the Counterpositive (*pratiyogin*), Professor Gopikamohan Bhattacharya Memorial Lectures for the Year 2013, 査読無(招待講義), 2014.2.26, Kurukshetra University (Kurukshetra).

〔図書〕(計　１件)

① Subash C. Dash and Wada Toshihiro, Nagoya University Association of Indian and Buddhist Studies (名古屋大学印度学仏教学研究会), *A Navya-nyaya Discussion on the Meaning of the Negative Particle NaN*, 2013, viii+89.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）
○取得状況（計　０件）

〔その他〕

ホームページ等
　特になし。

６．研究組織

(1)研究代表者
和田　壽弘　　（WADA TOSHIHIRO）
　名古屋大学・大学院文学研究科・教授
　研究者番号：00201260

(2)研究分担者
なし。

(3)連携研究者
なし。